

# 建設トツプランナー フォーラムin豊田

■ 4 ■

パネルディスカッションでは、建設トツプランナー倶楽部の米田雅子代表幹事(慶応義塾大学教授)がコーディネーターを務め、基調講演を行った稲垣隆司・前愛知県副知事と、事例発表した梅村正裕・中部森林開発研究会会長、鈴木陽子・矢作川をきれいにする会会長、馬淵和三・山辰組社長の3人がパネリストとして参加した。

米田教授は、矢作川を「サイクルシステム」を開ききれいにする会の活動が、発した中部森林開発研究会の梅村会長は「国内林業が外国産材に押されて低迷し、林業従事者の高齢化が進む中、かけがえのない森林資源をなんとか次世代に残していきたい」と、27年間にわたって森林の環境保全に取り組んだのがきっかけです」と語った。

一方、樹木廃棄物の活用技術「ウッドチップリ

建設業独自の模索  
1991年(ころから環

## パネルディスカッション

### 森と水と生物多様性

# 環境保全意識の高まりに期待



生態系を守る建設活動の在り方について活発な意見を交わした

環境保全活動に力を入れている岐阜県揖斐郡大野町の山辰組。馬淵和三社長は、アユの遡上(そじょう)に適した棚田式魚道の研究を岐阜大学大学院で続け、今春、57歳で農学博士の学位を取得した。馬淵氏は「建設業は世間から『環境破壊』というイメージで見られ、うちの小さな小さな会社は、求人しても若い人が来てくれない。そこで、ひと味違う企業を目指すために、建設業にしかできない環境保全活動に取

り組もうと考えた」と述べて。環境保全活動の必要性を説いた。

#### 自然と開発の調和へ

3月末に愛知県副知事を退任した稲垣氏は、県職員時代に環境畑を主に歩んできた経験から「自然をそのままの形で残せ」と言う方々がいるが、人間が手を加えなければ、自然や生態系が劣化してしまうケースもある。大切なポイントは、自然と開発の折り合いをどうつけていくかだ」と持論を展開した。

その上で、「かつて公害が大きな社会問題になった時代に比べると、確かに川の水はきれいになったが、まだ生態系が完全に戻ったわけではない。昔のような自然を取り戻すためには、単なる行政任せではなく、それぞれの主体がそれぞれの活動を継続していくしかない」と述べ、息の長い

最後に米田教授が「皆さんの力強い取り組みがCOP10(生物多様性条約第10回締約国会議)を契機に、全国へ発信され、豊かな森林や川、生態系を次世代に残していくため、いま何をなすべきかという議論につながっていくことを期待する」と締めくくった。(おわり)

(北海道建設新聞) 荒木正芳